

被開示者のトランスジェンダーへの態度とカミングアウトによる態

度変容について

—自己隠蔽と性役割の関連に着目して—

京都教育大学教育学研究科

学校教育専攻

学校教育専修

宮川 弦

目次

歴史的概観 … 1 ページ

問題と目的 … 8 ページ

方法 … 11 ページ

結果 … 13 ページ

考察 … 41 ページ

要約 … 49 ページ

引用文献 … 51 ページ

歴史的概観

1:LGBT について

LGBTとはレズビアン(Lesbian:女性の同性愛者), ゲイ(Gay:男性の同性愛者), バイセクシャル(Bisexual:両性愛者), トランスジェンダー(Transgender:こころの性とからだの性が一致していない)の頭文字から作られた性的マイノリティを指す総称として用いられている言葉である。LGBTを含む人のセクシュアリティの要素として生物的性別と性的指向, 性自認の3点が挙げられる。性的指向とは恋愛や性愛の対象がどこに向かうのかを指す言葉であり, 恋愛・性愛の対象が異性に向かう人のことを異性愛者(ヘテロセクシャル), 同性に向かう人のことを同性愛者(ホモセクシャル), どちらの性にも向かう人のことを両性愛者(バイセクシャル)という。性自認は自分の性をどのように認識しているのかということを指す言葉である。LGBTのうちL/G/Bは性的指向による分類であり, Tは性自認による分類である。1972年にアメリカ精神医学会は性的指向に関する同性愛を病理と認めない決議を出し, 1993年に国連世界保健機関(WHO)も同じく決議した。性自認に関わるトランスジェンダーと性同一性障害は同じものを指しているわけではなく, 性同一性障害は医療的なケアが必要とされる場合の診断名であり, トランスジェンダーの中には性別違和のように自身の性別に違和感があるものの医療的ケアを必要としない者もいる。性同一性障害の診断基準については日本精神神経学会(2012)が「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン 第4版」を提示しており, 「ジェンダー・アイデンティティの判定」「身体的性別の判定」「除外診断」「診断の確定」と多くの項目が組み込まれている。

近年では、性的指向や性自認が定まっていなかったり、どちらにも決めていない Q(クエスチョニング)といった LGBT の他にも様々なセクシュアリティが出てきており、すべてを包括して「LGBTs」や「SOGI(Sexual Orientation and Gender Identity:性的指向及び性自認)」という言い方をする場合もある。性的指向や性自認における少数者を表す総称として、「性的マイノリティ」や「性的少数者」など様々な呼び方があるが本研究では「LGBT」を用いる。

2:日本の LGBT を取り巻く環境とその困難について

電通ダイバーシティ・ラボが 2018 年に行った「LGBT 調査 2018」では、全国 20～59 歳の約 6 万人に対してアンケートを行った結果、全体の 8.9%が該当する結果となり前回の 7.6%より増加する形になった。また、「LGBT」という総称についての浸透率についての質問では 68.5%が「知っている」と回答し、前回の 37.6%から大きく増加したことがわかる。このことから、近年では LGBT に対する対象の増加や認知度が上がってきていることが予想される。

日本における LGBT をめぐる動きとして、平成 16 年に性同一性障害者の取り扱いの答礼に関する法律を施行、平成 27 年に東京都渋谷区で「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が施行され、同性カップルを「家族に相当する関係である」と認める同性パートナーシップ証明書の発行がされた。渋谷区に続いて世田谷区でも条例が制定され、各地の地方自治体でも検討がなされている。平成 29 年、一般社団法人日本経済団体連合会（経団連）は、日本の企業による LGBT に対しての理解を促すとともに、その理解の認識と受容を進めるための具体的な取り組み例などを示した。

LGBT が直面する困難について、2019 年に LGBT 当事者団体の連合体である「性的指向及び性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会」は、そのホームページ上に「性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト（第 3 版）」を公表している。そのリストでは「子ども・教育」「就労」「カップル・養育・死別・相続」「医療」「福祉」「公共サービス・社会保障」「民間サービス・メディア」「刑事手続」「その他（地域・コミュニティ）」の 9 カテゴリーの 354 項目が挙げられている。

学校での環境について「いのちリスペクト。ホワイトトリボンキャンペーン」が 2013 年に行った「LGBT の学校生活に関する実態調査」では LGBT であるかもしれないと気が付いた年齢についてのアンケートをおこなっており、その結果では性別違和のある男子での最頻期間は小学校入学前～小学校 6 年生、非異性愛男子では小学校 6 年生～高校 1 年生、性別違和のある女子では小学校 6 年生～高校 1 年生、非異性愛女子では小学校 6 年生～高校 1 年生という結果になりいずれも学校時代に気付き始めることが多いことが分かった。

3: 心理臨床における LGBT に関する研究

欧米では、同性愛・両性愛に関する心理的な関わり合いについての議論が多く行われており、アメリカ心理学会によって性的指向に対する適切な心理療法的な関わりについての指標が公表された (American Psychological Association, 2009)。日本ではこのような話し合いが行われることが少ない。品川(2006)は男性同性愛者へのカウンセラーの態度や臨床的判断についての検討を行い、男性クラ

イベントが異性愛者である場合と同性愛者である場合に、カウンセラーのネガティブな反応が生じることとその反応にカウンセラーのホモフォビア(同性愛嫌悪)が関連することを示した。日高(2012)が、学生相談経験のある臨床心理士数名を対象に行った調査では、大学院の臨床心理士養成過程においてセクシュアリティの教育を受けた経験が全員ほとんどないと回答しており、知識習得のためには自己学習のみに頼らざるを得ない状況であるとした。

4:カミングアウトに関する研究

LGBT が直面する問題の 1 つとしてカミングアウトがある。近年の社会の動向によって LGBT にとってポジティブな方向に向かっていく中、カミングアウトをすることも増えていると考えられる。しかし、カミングアウトに対して否定的な考えや反応を示す人も存在する。

「LGBT 当事者の意識調査～いじめ問題と職場環境などの調査～」(日高, 2016) では日本に在住している当事者 15064 人に対して調査を行った結果、カミングアウトの状況について「親へのカミングアウト」は全体の 22%, 「職場や学校でのカミングアウト」は 27.6% という結果であった。

一般に異性愛が前提とされる社会において差別や偏見の影響から同性愛者は自らの性的指向に悩むなど慢性的なストレスを抱えている(日高, 2005)。そのため性的マイノリティの人に対する理解や支援は必要であると言える。

和田(2010)は親友からのカミングアウトを受けた側の同性愛者に対する態度はポジティブなものに変化するが、その親友との交流意

図が減少したということを示した。また男性は同性愛者とわかるだけで、親友であっても開示内容に関わらず交わす行動を減らしたいと考えるようになったことや女性は自身が恋愛対象になっていない場合は行動意図が減少するもののその度合いが低くなっているという考えを示した。同性愛者に対する態度がポジティブなものに変化することについては親友からカミングアウトを受けた際に、その友人と少しでも交友関係が続けるために同性愛者一般に対する態度をポジティブなものに変化しているのではないかと考察している。しかし、先行研究では自身が他の人から同性愛者だと誤解されることへの不安が高い人ほど同性愛者との接触を回避する傾向にあることが明らかになっている(Buck, Plant, Ratcliff, Zielaskowski, & Boemer, 2013)。このことからカミングアウトを受けた側に人間は、その親友との交友関係が続けたい一方でほかの人から同性愛者だと誤解されたくないという葛藤が生じているのではないかと考えられる。

鈴木・池上(2015)は同性愛者と異性愛者の集団間の弁別性が非常に曖昧になった時に否定的な態度をとることでゲイとの差異化を図り自身のジェンダー自尊心(自分が男性/女性であることに誇りをもっていること)を維持する過程が働いていることを示唆している。また鈴木・池上(2020)では同性愛者に対する態度の性差の要因について、異性愛者自身の性別に基づく自尊心(ジェンダー自尊心)を維持しようとする心理機制の関与を考えた。その結果、男女ともにジェンダー自尊心が高い場合は恋愛対象とされるか否かに関わらず同性愛者に対する態度はポジティブに変化したが、ジェンダー自尊心が低い場合は恋愛対象であると伝えられると態度変化が見られなかった。しかし親友に対しての直接的な態度変容についてジェンダー自尊心は効果

を持たない可能性を示唆した。以上のように，同性愛者を対象としたカミングアウトやそれに伴う態度変容の研究についての研究は複数行われているが，トランスジェンダーを対象とした同様の研究は少ない。

5: トランスジェンダーについての研究

トランスジェンダーは生物的性別と性自認の違いにより日常生活で様々な困難を抱えている。それは教育，就労，医療や公共等様々な場面で遭遇する。例えば学校現場においては，児童生徒は男子か女子のどちらかに属し，体育の時間など男女別の場面に遭遇する頻度が高いため，性自認の異なる性別違和を抱える児童生徒にとって過ごしにくい環境にある。文部科学省が2016年に教職員向けに作成したガイドライン「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」では，学校における性同一性障害に係る対応に関する状況報告の結果，全国で606件の報告があったとした。そのうちの403件（66.5%）が高等学校での報告であり，約6割の児童生徒が周りに知らせることなく学校生活を過ごしてきたとした。このことから，性別違和や周りとの違いに気づいてから，それを周りに相談するまでには困難とタイムラグがあり現状の学校での相談のしにくさがうかがえる。天野・佐々木・松本・大守(2019)は性別違和をもつ患者の診療録から学校における困難や悩みを明らかにした。服装や所持品，トイレ，いじめ・不登校，課外活動，友人関係や恋愛関係など様々なカテゴリーで性別違和を抱えた患者はそれぞれの困難を体験してきた。

中塚ら(2004)は性同一性障害の329症例に対して調査を行い，

FTM(Female To Male:生物学的性別は女性だが性自認が男性である人)症例と MTF(Male To Female:生物学的性別は男性だが性自認が女性である人)症例に分けて検討した。その結果、 小学校入学以前に性別違和感を自覚し始めることが多い FTM 症例に比較し、MTF 症例では発症が遅い症例が多かったが、ほとんどが思春期以前に性別違和感を自覚していた。思春期に多い問題行動では、不登校が全体の 29.2%, 自殺念慮が 74.8%, 自殺未遂・自傷行為も 31.0%と高い数値であった。また、二次的に生じたと考えられる強迫神経症やうつ状態などの精神科的合併症も 17.9%にみられ、特に MTF 症例で多く見られた。

問題と目的

LGBT という存在が徐々に認知されつつある一方、「全ての人が性の多様性の上にある」という考えは今の社会に生きる人々全員がもっているとは言い難い。LGBT について考える際に、その存在に理解を示さなかったり嫌悪感を抱いたりする人々も多い。その結果、LGBT であることをきっかけとするいじめや差別という問題につながってしまうことも考えられる(e.g. LGBT 法連合会, 2019)。そうすると、LGBT である人々は自身のセクシャリティをなかなかカミングアウトできず周りに援助を要請することも難しくなってくる(e.g. 日高, 2005, 2016)。社会が正しく LGBT を理解するためには LGBT という存在に対して様々な視点から研究を続けていくことが求められる。

そこで本研究では、LGBT が抱える様々な問題のうちカミングアウトを取り上げたい。カミングアウトの研究については同性愛者であるという状況を想定したものが多く(e.g. 鈴木・池上, 2015)、トランスジェンダーであるとカミングアウトしたと想定して調査を行った研究は少ない。そこで本研究では、LGBT の中でもトランスジェンダーを取り上げカミングアウトについての検討を行う。そしてカミングアウトについての研究を進める上で、自己隠蔽と性役割を取り上げたい。鈴木(1994)は、性役割とは、男女にそれぞれふさわしいとみなされる社会的期待・規範およびそれらに基づく行動としている。また性役割態度は、性役割に対して、一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向を示した。性役割態度とトランスジェンダーとの関連について吉村(2018)は、トランスジェンダーへの否定的な態度を軽減させるためには平等主義的な性役割態度を示すかどうかの影響を与えているとしているが、この研究では対象者が男や女という

性別にどのようなイメージをもっているかという性役割については言及されていない。カミングアウトについての研究はカミングアウトを受けた際の態度変容についての研究が多く(e.g.和田, 2010), 対象者がカミングアウトという行為そのものについてどのような意識をもっているのかについて言及している研究は少ない。河野(2001)は, 自己隠蔽を「否定的(negative)もしくは嫌悪的(distressing)と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向」と定義しており, 自己隠蔽は開示によるストレス低減現象の研究において重要な概念であり, 心的外傷の開示を検討する場合にも有用であるとしていることから, 自身のセクシャリティを開示するカミングアウトという行為に対する意識と関連させて見ていくことができると考えられる。これらのことから, カミングアウトを受ける側の人のトランスジェンダーに対する態度と, 親しい友人からトランスジェンダーであるとカミングアウトされた場面を想定してその友人に対して抱く印象について, 被開示者の自己隠蔽と性役割という観点から関連を見出し検討することを目的とする。また性役割の意識の違いに加え, 自己隠蔽の程度によって, トランスジェンダーへの態度とカミングアウトを受けた際の相手への態度変容がどのような影響を受けるのかについても検討していく。

そこで本研究では以下の仮説を立てる。

仮説 1 自己隠蔽しにくい人は, 自己隠蔽しやすい人に比べてトランスジェンダーに対して肯定的な態度をとる。

仮説 2 自己隠蔽しにくい人は, 自己隠蔽しやすい人に比べて親しい親友からカミングアウトされたとき, 相手に対して良い印象を抱く。

仮説 3 性役割に偏見がない人は、 そうでない人に比べてトランスジェンダーに対して肯定的な態度をとる。

仮説 4 性役割に偏見がない人は、 そうでない人に比べて親しい友人からカミングアウトされたとき、 相手に対して良い印象を抱く。

仮説 5 自己隠蔽しにくい人のうち、 性役割に偏見がない人は偏見がある人に比べてトランスジェンダーに肯定的な態度をとる。

仮説 6 自己隠蔽しにくい人のうち、 性役割に偏見がない人は偏見がある人に比べて親しい友人からカミングアウトされたとき、 相手に対して良い印象を抱く。

の 6 つを設定する。この研究によってトランスジェンダーがカミングアウトしやすい環境を考えるとともにカミングアウトを受ける側に人間がどのような傾向があるのかを明らかにし、 今後の LGBT 研究への指標としたい。

方法

1:対象者

教職課程に在学する大学生 148 名(男性:68 名,女性:77,未記入:3 名
平均年齢:19.9 歳 SD=.72)

2:質問紙の構成

フェイスシート:年齢,性別を自由記述で回答を求めた。

日本語版自己隠蔽尺度

Larson&Chastain(1990)によって開発された「自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)」を元に,河野(2001)により日本人への適用性を考慮して作られた「日本語版自己隠蔽尺度」を使用した。「1:そうではない」から「5:そうである」の 5 件法で回答を求めた。この尺度によって対象者の自己隠蔽の意識について測定した。

脱男性役割態度スケール(SRALM)

鈴木(1994)が作成した「脱男性役割態度スケール(SRALM)」を使用した。

「1:ぜんぜんそう思わない」から「5:まったくそのとおりだ」の 5 件法で回答を求めた。この尺度によって男性の性役割に対するイメージを測定した。

平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)

鈴木(1994)が作成した「平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)」を使用した。「1:ぜんぜんそう思わない」から「5:まったくそのとおりだ」の 5 件法で回答を求めた。この尺度によって男女の性役割態度における平等性志向のレベルを測定した。

日本語版トランスジェンダー態度信念尺度

Kanamori, Cornelius-White, Pegors, Daniel, & Hulgus(2017)が作成した「トランスジェンダー態度・信念尺度(Transgender Attitude and Beliefs Scale)」を吉村(2018)が日本語訳した「トランスジェンダー態度・信念尺度日本語版(TABS-J)」を使用した。「1:全然そう思わない」から「7:非常にそう思う」の7件法で回答を求めた。この尺度によってトランスジェンダーに対する態度について測定した。

親しい同性の友人を想定

親しい同性の友人を1人想定してもらい、その親しさを「1:全く親しくない」から「7:非常に親しい」の7件法で程度の回答を求めた。

対人魅力尺度

藤森(1980)が作成した「対人魅力尺度」を使用した。先に想定した親しい友人がトランスジェンダーであり、その親しい友人から対象者にカミングアウトをされたという場面を設定した。その際鈴木・池上(2020)の同性愛のカミングアウトに関する先行研究を参考に、「ある日、あなたは、その友人から呼び出されました。そして、その友人から、自分はトランスジェンダーであると打ち明けられました。そして、これからも今までと同じように接してほしいと告げられました。」と教示した。そして、その後に想定した親しい親友に対して感じたことについて「1:全くそう思わない」から「7:非常にそう思う」の7件法で回答を求めた。この尺度によって親しい同性の友人からトランスジェンダーとカミングアウトを受けた際、相手に感じる魅力の度合いを測定した。

結果

1:尺度の因子分析

質問紙で使用した各尺度について探索的因子分析を行った。自己隠蔽尺度について主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、解釈可能性から 2 因子を抽出した。因子負荷量が.40 に満たない、または各因子に負荷量が高い 2 項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果、2 因子 10 項目からなる自己隠蔽尺度とした。第 1 因子は「もし友達に自分の秘密を話したら、友達は私のことを嫌いになると思う」や「自分の秘密はあまりにもイヤなものなので、他の人には話せない」といった相手に対する「怖い」や「相手が嫌いになると思う」という心情についての項目で主に構成されているため「対人恐怖心」と名付けた。第 2 因子は「自分の秘密を話したとして良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う」や「自分のことを人に話すことに抵抗を感じる」といった自分の秘密を話すか話さないかという抵抗を表す項目で主に構成されているため「自己隠蔽」と名付けた。対人恐怖心因子に高い因子負荷量を示した 6 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha=.890$ 、自己隠蔽因子に高い因子負荷量を示した 4 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha=.844$ とそれぞれ十分な信頼性が得られ、内的整合性が確認できた(Table1)。

Table1 自己隠蔽尺度の因子分析結果

	因子	
	1	2
対人恐怖心 $\alpha = .890$		
もし友達に自分の秘密を話したら、友達は私のことを嫌いになると思う	.898	-.058
誰にも打ち明けられない重要な秘密をもっている	.848	-.102
自分の秘密はあまりにもイヤなものなので、他の人には話せない	.795	.054
自分を苦しめる秘密をもっている	.740	.082
自分の秘密について聞かれたときには、嘘をつこうと思う	.673	.108
隠しておきたいことを知られてしまうのがこわいと思うことがある	.460	.17
自己隠蔽 $\alpha = .844$		
自分の秘密を話したとして良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う	-.169	.895
自分のことを人に話すことに抵抗を感じる	.120	.685
親友にも話せないことがある	.139	.658
自分について人に話していないことがたくさんある	.136	.652
因子間相関		.667

脱男性役割態度スケールについては得点が高いほど、脱男性役割的な態度になるように逆転項目処理を行った。その後、主因子法・Promax 回転を行い、解釈可能性から 2 因子を抽出した。因子負荷量が .40 に満たない 1 項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果、2 因子 8 項目からなる脱男性役割態度スケールとした。第 1 因子は「男性の成功をはかる最大のものは経済力である」や「男性は精神的にも肉体的にもタフで強く、自信を持っていなければならない」といった男性像についての項目(逆転項目)で主に構成されているため「脱男性役割」、第 2 因子は「男性が家事に参加することで主婦の立場が理解しやすくなり、互いに平等な関係を持ちやすくなる」や「男性は家事に参加することで家族の一員としての意識が高まる」といった男性が家庭に参加するという項目で主に構成されているため「男性の家庭参加」と名付けた。既存の男性像因子に高い因子負荷量を示した 5 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha=.707$ 、男性の家庭参加因子に高い因子負荷量を示した 3 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha=.611$ であった。「男性の家庭参加」は 3 項目と少なく、信頼性がやや低かったが、第 1 因子は男性というもののイメージ、第 2 因子は男性の家庭への参加ということなる方向性であると考え採用した。

Table2 脱男性役割態度スケールの因子分析結果

	因子	
	1	2
脱男性役割 $\alpha = .707$		
男性の成功をはかる最大のものは経済力である※	.804	-.024
男性は精神的にも肉体的にもタフで強く，自信を持っている※	.788	-.077
喜んで家事をするような男性は軟弱である※	.511	.439
男性は結婚する以上妻子を養う義務がある※	.507	-.338
男性が家事をすると男らしくなくなる※	.411	.149
男性の家庭参加 $\alpha = .611$		
男性が家事に参加することで主婦の立場が理解しやすくなり，互いに平等な関係を持ちやすくなる	.079	.719
男性は家事に参加することで家族の一員としての意識が高まる	-.129	.584
男性も，働く女性同様，仕事と家庭の両立をはからなければならない	.079	.440
因子間相関		
		-.225

※は逆転項目

平等主義的性役割態度スケール短縮版については、得点が高くなるほど男女の性役割に対して平等な態度になるように逆転項目を行った。その後、主因子法・Promax 回転を行い、解釈可能性から 2 因子を抽出した。因子負荷量が .40 に満たない 1 項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果、2 因子 19 項目からなる平等主義的性役割態度スケール短縮版とした。第 1 因子は「女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である」や「結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである」といった男女の家庭での在り方についての項目(逆転項目)で主に構成されていることから「男女の家庭参加」、第 2 因子は「家庭や社会で、男女平等の権利と義務をもっと強調すべきだ」や「将来は、女性が男性と完全に平等の仕事内容、賃金、昇進を得られるようになることが望ましい」といった男女の社会における平等についての項目で主に構成されているため「男女の社会的平等」と名付けた。男女の家庭参加因子に高い因子負荷量を示した 11 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha=.907$ 、男女の社会的平等因子に高い因子負荷量を示した 8 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha=.769$ とそれぞれ十分な信頼性が得られ、内的整合性が確認できた(Table3)。

Table3 平等主義的性役割態度スケール短縮版の因子分析結果

	因子	
	1	2
男女の家庭参加 $\alpha = .907$		
女性の居るべき場所は家庭であり，男性の居るべき場所は職場である※	.816	.071
娘は将来主婦に，息子は職業人になることを想定して育てるべきである※	.739	.126
結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである※	.733	-.021
女性は，家事や育児をしなければならないから，フルタイムで働くよりパートタイムで働いた方がよい※	.721	.014
主婦が仕事を持つと，家族の負担が重くなるのでよくない※	.719	-.009
女性が，社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのがむずかしくなるから，そういう職業を持たないほうがよい※	.707	.146
子育ては女性にとって一番大切なキャリアである※	.707	-.110
家事や育児をしなければならないから，女性はあまり責任の重い，競争の激しい仕事をしないほうがよい※	.685	-.028
男の子は男らしく，女の子は女らしく育てることが非常に大切である※	.673	-.071
主婦が働くと夫をないがしろにしがちで，夫婦関係にひびがはいりやすい※	.637	-.095
経済的に不自由でなければ，女性は働かなくてよい※	.550	-.018

男女の社会的平等 $\alpha = .769$

家庭や社会で，男女平等の権利と義務をもっと強調すべきだ	-.042	.738
将来は，女性が男性と完全に平等の仕事内容，賃金，昇進を得られるようになることが望ましい	.069	.611
女性はこどもが生まれても，仕事をつづけたほうがよい	-.133	.553
女性が社会に出て働けば，社会の進歩や発展にとってもプラスになることが多い	.010	.548
男性と平等になるために，女性が自立の意識をもって地位向上をめざすべきである	-.248	.532
女性であるという理由だけで仕事上のチャンスを奪ってはいけない	.077	.495
	.132	.477
家事は男女の共同作業である		
女性の人生において，妻であり母であることも大事だか、仕事	.072	.464
をすることもそれと同じくらい重要である		

因子間相関

.206

※は逆転項目

日本語版トランスジェンダー態度信念尺度については、得点が高いほどトランスジェンダーに対する態度が肯定的になるように逆転項目処理を行った。その後、主因子法・Promax 回転を行い解釈可能性から 3 因子を抽出した。「もし私が男性として生まれたら、私はそれを変えることはないだろう。」という項目については因子負荷量が低かったが、その人の性の多様性への寛容さを測ることができる項目と判断し採用した。第 1 因子は「人が男性であるか女性であるかどうかは、その人の生殖器によってのみ決まる。」や「不完全な生殖器をもって生まれた子どもは、男性または女性のどちらか一方に決められるべきである。」といった性の多様性について問う項目で主に構成されているため「性の多様性への寛容さ」、第 2 因子は「トランスジェンダーの人は、皆と同じように自らの課題と向き合っている人間である。」や「トランスジェンダーの人の状態について私がどのように感じるかにかかわらず、トランスジェンダーの人は価値のある人間である。」といったトランスジェンダーの人的価値についての項目で主に構成されているため「トランスジェンダーの尊厳」、第 3 因子は「もし誰かがトランスジェンダーであったと知っても、私はその人と偏見のない友達関係を続けられるだろう。」や「私はトランスジェンダーの人の集団と一緒にいることに抵抗が無い。」といったトランスジェンダーへの抵抗感についての項目で主に構成されているため「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」と名付けた。性の多様性への寛容さ因子に高い因子負荷量を示した 11 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha = .877$ 、トランスジェンダーの尊厳因子に高い因子負荷量を示した 7 項目について α 係数を算出したところ、 $\alpha = .911$ 、トランスジェンダーへの抵抗感のなさ因子に高い因子負荷量を示した 7 項目

について α 係数を算出したところ、 $\alpha = .873$ とそれぞれ高い数値が得られたため整合性が確認された (Table4)。

Table4 日本語版トランスジェンダー態度信念尺度の因子分析結果

	因子		
	1	2	3
性の多様性への寛容さ $\alpha = .877$			
不完全な生殖器をもって生まれた子どもは、男性または女性のどちらか一方に決められるべきである。※	.832	.008	-.299
人が男性であるか女性であるかどうかは、その人の生殖器によってのみ決まる。※	.760	.128	-.175
男性であるか女性であるかについて確信がもてない人は、精神病がある。※	.736	.042	-.014
すべての大人は、男性または女性のどちらかであることを明確にすべきである。※	.729	-.010	-.058
もし知りあいからトランスジェンダーであることを打ち明けられたら、私はその人に近づかなくなるだろう。※	.728	.056	.188
人間は男性または女性しか存在せず、中間は存在しない。※	.539	.249	-.053
もし私の上司がトランスジェンダーであったとしたら、私は抵抗がある。※	.529	-.081	.441

私は、職場でトランスジェンダーの人と密に協力しながら働くことに抵抗がある。※	.514	.011	.362
もしトランスジェンダーの人に同居人になってほしいと頼まれたら、私は断るだろう。※	.452	-.085	.188
もし私の担当医がトランスジェンダーであったと知ったら、私はほかの医者に診てほしいと思うだろう。※	.438	.124	.303
もし私が男性として生まれたら、私はそれを変えることはないだろう。※	.389	-.141	-.117

トランスジェンダーの尊厳 $\alpha = .911$

トランスジェンダーの人は、皆と同じように自らの課題と向き合っている人間である。	-.175	1.010	-.040
トランスジェンダーの人は、ほかの人と同じように住む権利を有すべきである。	-.088	.822	.092
私は、トランスジェンダーの人を温かく迎え入れる職場で働くことに抵抗がない。	.200	.690	.116
人間のほとんどは男性または女性であるが、中間というアイデンティティもある。	-.098	.627	.185
トランスジェンダーの人の状態について私がどのように感じるかにかかわらず、トランスジェンダーの人は価値のある人間である。	.219	.627	.006
トランスジェンダーの人は、ほかの人と同じように尊敬と尊厳をもって扱われるべきである。	.443	.503	-.080
その人が男性であるか女性であるかどうかは、本人が男性と感じるか女性と感じるか次第である。	.086	.470	.235

トランスジェンダーへの抵抗感のなさ $\alpha = .873$

もし誰かがトランスジェンダーであったと知っても、私はその人と偏見のない友達関係が続けられるだろう。	-.202	.152	.829
私はトランスジェンダーの人の集団と一緒にいることに抵抗が無い。	-.118	.048	.808
私は、トランスジェンダーの人が私の家に食事をしに来ることに抵抗が無い。	-.154	.108	.736
もし隣人がトランスジェンダーであったとしても、私は抵抗がない。	-.174	.286	.713
もし私の子どもがトランスジェンダーの友達を家に連れてきたとしても、私はその人を家にいれることに抵抗がない。	-.085	.267	.577
私は、トランスジェンダーの人と二人きりになることに抵抗がある。※	.500	-.249	.538
もし誰かがトランスジェンダーであったと知ったら、私はその人を避けようとするだろう。※	.348	-.134	.537

因子間相関

因子1	.517	.652
因子2		.653

※は逆転項目

対人魅力尺度に関しては同様に主因子法・Promax 回転で因子分析を行ったが 1 因子解が妥当であると考えられた。そのため主成分分析を行った結果, 1 因子 24 項目からなる対人魅力因子として設定した (Table5)。対人魅力尺度について α 係数を算出したところ, $\alpha = .980$ と十分な信頼性が得られ, 内的整合性が確認された。

Table5 対人魅力尺度の主成分分析結果

	成分 1
～さんと友達になりたい。	.934
～さんと一緒に遊びたい。	.925
～さんと一緒に食事に行きたい。	.924
～さんは好ましい。	.922
～さんに安心して頼み事ができる。	.916
～さんに会って話をしたい。	.914
～さんと一緒にいると楽しい。	.905
～さんと個人的なことでも話したい。	.901
～さんは正直で信頼できる。	.899
～さんと気が合いそうである。	.887
～さんはほかの人から信頼されている。	.886
～さんに個人的なことでも話したい	.884
～さんは社会的に望ましい人である。	.868
～さんに親しみを感じる。	.863
～さんと自分の好きな事や趣味について話を したい。	.854
～さんに悩みを相談したい。	.847
～さんと一緒にコンサートに行きたい。	.839
～さんと旅行に行きたい。	.794
～さんは私にとって理想的な人です。	.760
～さんと一緒にハイキングに行きたい。	.754

～さんと一緒にスポーツをしたい。	. 731
～さんの気持や考えがよくわかる。	. 695
～さんは頭がよい。	. 632
～さんは何をするにも手ぎわがよい。	. 630

2 自己隠蔽と性役割の分散分析

「日本語版トランスジェンダー態度信念尺度」の3因子と「対人魅力尺度」を従属変数に、「自己隠蔽尺度」と性役割の尺度を独立変数とした2要因分散分析を行った。性役割に「脱男性役割態度スケール」の2因子、「平等主義的性役割態度スケール」の2因子ごとに分析を行った。自己隠蔽尺度は尺度全体の平均値を基準に高群と低群の2群に分けた。性役割の尺度はそれぞれ因子ごとの平均値を基準に高群と低群に分けた。

2-1 性の多様性への寛容さの結果

「日本語版トランスジェンダー態度信念尺度」の第1因子「性の多様性への寛容さ」については、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」の主効果($F(1,117)=11.302, p<.01, F(1,117)=8.665, p<.01$)が見られ、自己隠蔽低群の方が高群よりも性の多様性への寛容さの得点が高く、脱男性役割の高群の方が低群よりも性の多様性への寛容さの得点が高かった(Table6)。また交互作用($F(1,117)=4.601, p<.05$)が見られた(Figure1)。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群には有意差が見られなかったが低群に有意差が見られ、脱男性役割高群には有意差が見られなかったが低群には有意差が見られた。つまり、性の多様性への寛容さにおいて自己隠蔽しにくい人のうち固まった男性像をもっていない人ほど、人が男か女のどちらかに分かれるべきという考えをもっていない。また、固まった男性像をもっている人のうち自己隠蔽しにくい人ほど、人が男か女のどちらかに分かれるべきという考えをもっていないといえる。

次に、第1因子「性の多様性への寛容さ」において「自己隠蔽尺度」

と「男女の家庭参加」については「自己隠蔽尺度」にのみ主効果 ($F(1,119)=5.553, p<.05$)が見られ、自己隠蔽高群の方が低群よりも得点が高かった (Table7)。また 交互作用 ($F(1,119)=4.513, p<.05$)が見られた (Figure2)。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られ、男性の家庭参加高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られた。つまり、自己隠蔽しにくい人のうち男女の家庭での役割に平等的な考えをもっていない人ほど、人が男か女のどちらかに分かれるべきという考えをもっていない。また、男女の家庭での役割に平等的な考えをもっていない人のうち、自己隠蔽しやすい人ほど人が男か女のどちらかに分かれるべきという考えをもっていないといえる。

また、「自己隠蔽尺度」と「男性の家庭参加」では自己隠蔽尺度にのみ主効果 ($F(1,119)=21.045, p<.001$)が見られ、交互作用は見られなかった (Table8)。「自己隠蔽尺度」と「男女の社会的平等」では「男女の社会的平等」にのみ主効果 ($F(1,119)=5.716, p<.05$)が見られ、交互作用は見られなかった (Table9)。「男女の社会的平等」では、高群の方が低群より得点が高かった。

Table6 自己隠蔽と脱男性役割における性の多様性への寛容さの平均と標準偏差

	脱男性役割高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	.51.866	8.109	48.000	9.014
低群	54.032	6.322	48.720	9.211

Table7 自己隠蔽と男女の家庭参加における性の多様性への寛容さの平均と標準偏差

	男女の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	54.441	7.187	55.000	8.044
低群	46.094	7.996	48.414	6.805

Table8 自己隠蔽と男性の家庭参加における性の多様性への寛容さの平均と標準偏差

	男性の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	52.341	8.365	47.200	8.237
低群	51.667	7.842	51.611	8.668

Table9 自己隠蔽と男女の社会的平等における性の多様性への寛容さの平均と標準偏差

	男女の社会的平等高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	52.143	8.261	48.419	8.724
低群	53.179	7.625	50.172	8.292

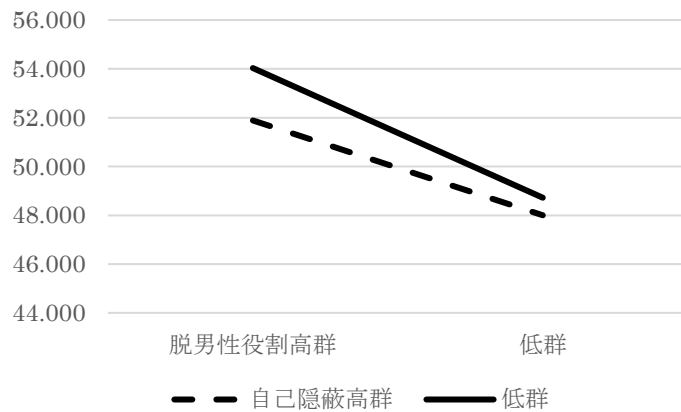


Figure1 自己隠蔽と脱男性役割における性の多様性への寛容さの平均

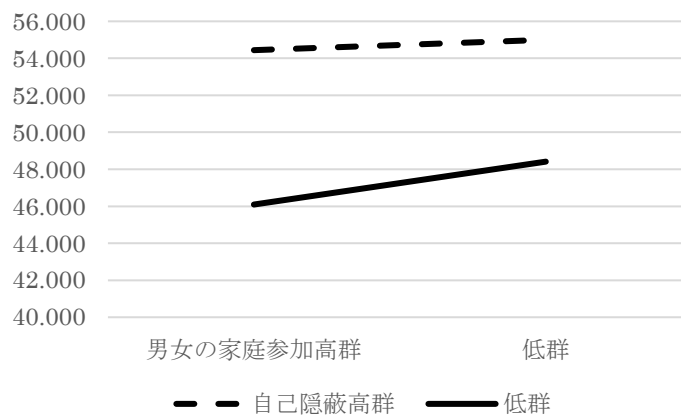


Figure2 自己隠蔽と男女の家庭参加における性の多様性への寛容さの平均

2-2 トランスジェンダーの尊厳

第2因子「トランスジェンダーの尊厳」において、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」に主効果($F(1,119)=.14.348$, $p<.001$, $F(1,119)=10.198$, $p<.01$)が見られ、自己隠蔽高群の方が低群よりもトランスジェンダーの尊厳の得点が高かった。脱男性役割低群の方が高群よりも得点が高かった(Table10)。また交互作用($F(1,119)=8.024$, $p<.01$)が見られた(Figure2)。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られた。また脱男性役割高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られた。このことから、自己隠蔽しにくい人のうち固まった男性像をもっている人ほどトランスジェンダーに対して人間的価値を見出していると言える。固まった男性像をもっている人のうち自己隠蔽しやすい人の方がトランスジェンダーに対して人間的価値を感じているといえる。

また「自己隠蔽尺度」と「男性の家庭参加」では自己隠蔽尺度にのみ主効果($F(1,119)=28.337$, $p<.001$)が見られたが、交互作用は見られなかった(Table11)。「自己隠蔽尺度」と「男女の家庭参加」では主効果と交互作用が見られなかった(Table12)。「自己隠蔽尺度」と「男女の社会的平等」では両方に主効果($F(1,119)=7.048$, $p<.01$, $F(1,119)=7.754$, $p<.01$)が見られ、交互作用は見られなかった(Table13)。「男女の社会的平等」では、高群の方が低群より得点が高かった。

Table10 自己隠蔽と脱男性役割におけるトランスジェンダーの尊厳の平均と標準偏差

	脱男性役割高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	37.722	3.934	38.500	7.077
低群	34.100	3.307	37.520	3.590

Table11 自己隠蔽と男性の家庭参加におけるトランスジェンダーの尊厳の平均と標準偏差

	男性の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	31.000	4.137	38.282	3.113
低群	33.560	7.261	37.611	4.098

Table12 自己隠蔽と男女の家庭参加におけるトランスジェンダーの尊厳の平均と標準偏差

	男女の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	37.794	6.159	34.250	4.931
低群	38.821	3.444	37.345	3.335

Table13 自己隠蔽と男女の社会的平等におけるトランスジェンダーの尊厳の平均と標準偏差

	男女の社会的平等高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	38.543	3.315	33.290	6.807
低群	38.964	2.860	37.207	3.773

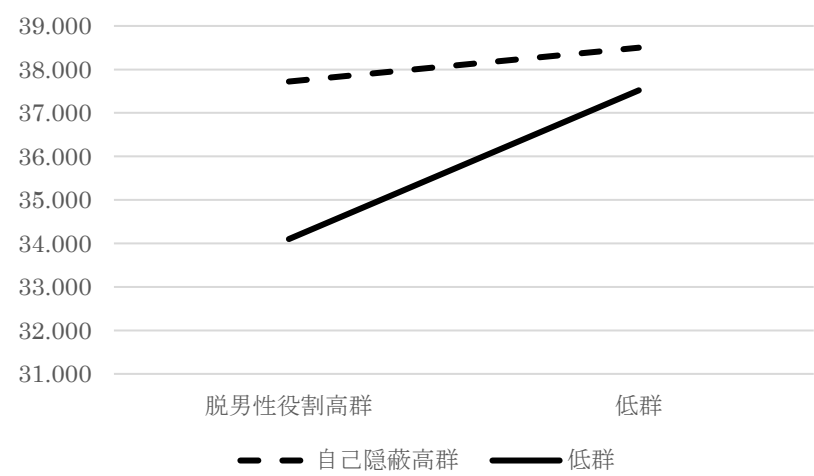


Figure3 自己隠蔽と脱男性役割におけるトランスジェンダーの尊厳の平均

2-3 トランスジェンダーへの抵抗感のなさ

第3因子「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」において、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」に主効果($F(1,119)=13.491, p<.001$, $F(1,119)=9.704, p<.01$)が見られ、自己隠蔽低群の方が高群よりトランスジェンダーへの抵抗感の無さの得点が高く、脱男性役割高群の方が低群より得点が高かった(Table14)。また交互作用($F(1,119)=5.591, p<.05$)が見られた(Figure4)。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られ、脱男性役割高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られた。このことから、自己隠蔽しにくい人のうち固まった男性像をもっていない人ほどトランスジェンダーへの抵抗感が少ない。また、固まった男性像をもっている人のうち自己隠蔽しにくい人ほどトランスジェンダーへの抵抗感が少ないといえる。

また「自己隠蔽尺度」と「男性の家庭参加」では自己隠蔽尺度に主効果($F(1,119)=22.337, p<.001$)が見られ、交互作用は見られなかった(Table15)。「自己隠蔽尺度」と「男女の家庭参加」では自己隠蔽尺度にのみ主効果($F(1,119)=4.630, p<.05$)が見られ、交互作用は見られなかった。「自己隠蔽尺度」と「男女の社会的平等」では両方に主効果($F(1,119)=5.188, p<.05$, $F(1,119)=10.254, p<.01$)が見られ、交互作用は見られなかった(Table17)。「男女の社会的平等」では、高群の方が低群より得点が高かった。

Table14 自己隠蔽と脱男性役割におけるトランスジェンダーへの抵抗感のなさの平均と標準偏差

	脱男性役割高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	35.111	5.592	32.433	6.830
低群	37.125	4.891	34.080	6.183

Table15 自己隠蔽と男性の家庭参加におけるトランスジェンダーへの抵抗感のなさの平均と標準偏差

	男性の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	35.073	5.567	31.960	6.988
低群	36.026	5.122	35.278	6.756

Table16 自己隠蔽と男女の家庭参加におけるトランスジェンダーへの抵抗感のなさの平均と標準偏差

	男女の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	34.735	7.126	33.000	5.202
低群	37.786	4.467	33.862	6.084

Table17 自己隠蔽と男女の社会的平等におけるトランスジェンダーへの抵抗感のなさの平均と標準偏差

	男女の社会的平等高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	35.200	5.549	32.419	6.810
低群	36.750	6.418	34.862	4.725

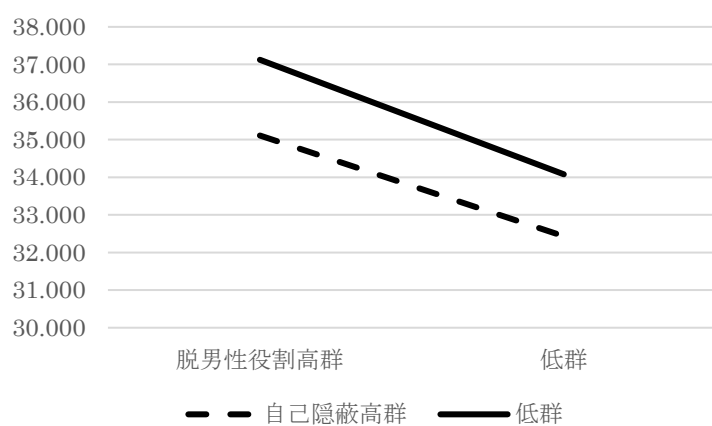


Figure4 自己隠蔽と脱男性役割におけるトランスジェンダーへの抵抗感のなさの平均

2-4 対人魅力尺度

「対人魅力尺度」の分析では初めに、想定した同性の友人の親しさの程度を5未満に記した対象者2名をあらかじめ除外して分析を行った。「対人魅力尺度」について、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」に主効果($F(1,117)=15.153, p<.001, F(1,117)=13.922, p<.001$)が見られ、自己隠蔽低群の方が高群よりも対人魅力尺度の得点が高く、脱男性役割高群の方が低群よりも得点が高かった(Table18)。また交互作用($F(1,117)=7.765, p<.01$)が見られた(Figure5)。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られ、脱男性役割高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られた。このことから、自己隠蔽しにくい人のうち固まった男性像をもっていない人ほど、カミングアウトを親しい友人からされた後もその友人に良い印象をもっている。また、固まった男性像をもっている人のうち自己隠蔽しにくい人ほど、カミングアウトを親しい友人からされた後もその友人に良い印象をもっているといえる。

また、「自己隠蔽尺度」と「男女の社会的平等」に主効果($F(1,117)=8.104, p<.01, F(1,117)=10.590, p<.01$)が見られ、自己隠蔽高群の方が低群よりも自己隠蔽の得点が高く、男女の社会的平等高群の方が低群よりも得点が高かった(Table19)。また交互作用($F(1,117)=3.021, p<.10$)が見られた(Figure6)。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られ、男女の社会的平等高群に有意差は見られなかったが低群に有意差が見られた。このことから、自己隠蔽しにくい人のうち男女の社会的な役割に平等な考えがある人ほどカミングアウトを親しい友人からされた後もその友人に良い印象をもっている。また、男女の社会的な役割

に平等な考えがあまりない人のうち、自己隠蔽しにくい人ほどカミングアウトを親しい友人からされた後もその友人に良い印象をもっているといえる。

また「自己隠蔽尺度」と「男性の家庭参加」では自己隠蔽尺度にのみ主効果($F(1,117)=26.676, p<.001$)が見られ、交互作用は見られなかった(Table20)。「自己隠蔽尺度」と「男女の家庭参加」では主効果も交互作用も見られなかった。

Table18 自己隠蔽と脱男性役割における対人魅力尺度の平均と標準偏差

	脱男性役割高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	148.250	18.098	144.393	21.826
低群	156.406	14.588	152.840	13.284

Table19 自己隠蔽と男女の社会的平等における対人魅力尺度の平均と標準偏差

	男女の社会的平等高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	152.912	16.502	139.367	20.961
低群	160.786	9.065	149.103	15.707

Table20 自己隠蔽と男性の家庭参加における対人魅力尺度の平均と標準偏差

	男性の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	149.590	18.820	141.840	20.626
低群	165.000	12.426	151.778	16.884

Table21 自己隠蔽と男女の家庭における対人魅力尺度の平均と標準偏差

	男女の家庭参加高群		低群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己隠蔽高群	150.176	18.931	142.467	20.192
低群	159.000	13.185	150.828	13.872

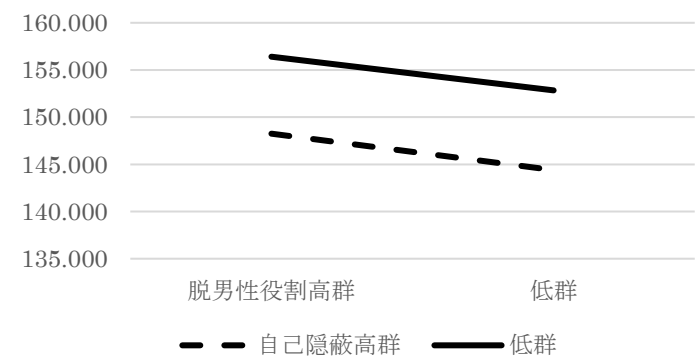


Figure5 自己隠蔽と脱男性役割における対人魅力尺度の平均

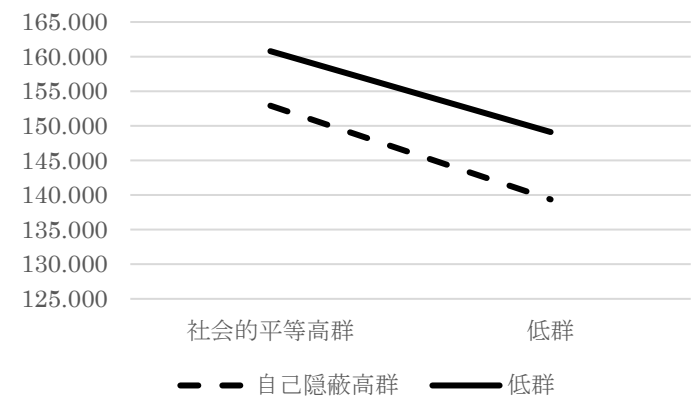


Figure6 自己隠蔽と男女の社会的平等における対人魅力尺度の平均

考察

本研究では調査対象者のトランスジェンダーに対する態度と、親しい友人からトランスジェンダーであるとカミングアウトされた場面を想定してその友人に対して抱く印象について自己隠蔽と性役割という観点から関連を見出し検討することを目的とした。このことにより、どういった人物がトランスジェンダーに肯定的な態度をとるのか、トランスジェンダーのカミングアウトを受けても抵抗を感じにくいのか検討したい。

1:性の多様性への寛容さについて

第1因子「性の多様性への寛容さ」について、「自己隠蔽尺度」「脱男性役割」が共に主効果と交互作用が見られた。鈴木ら(2015)は同性愛者と異性愛者の集団間の弁別性が非常に曖昧になった時に否定的な態度をとることでゲイとの差異化を図り自身のジェンダー自尊心(自分が男性/女性であることに誇りをもっていること)を維持する過程が働いていることを示唆している。本研究の結果から、自己隠蔽の傾向が少ない人ほど男性と女性の曖昧さに寛容的になり、男性や女性であるべきかという考えについても多様性を受け入れることができたと考えられる。また、男性と女性の曖昧さに寛容的なほど性別に対する固定化されたイメージをもっておらず得点が高いという結果に繋がったといえる。また性別に固定化されたイメージをもっている人のうち、自己隠蔽の傾向が少ない人の方が得点が高かった。性別に固定化されたイメージをもっている人でも、自己隠蔽の傾向が少ない人ほど相手が男性か女性のどちらかであることに固執せず、LGBTという人には言えない内容でも肯定的になれることが示唆される。

また「自己隠蔽尺度」と「男女の家庭参加」については「自己隠蔽尺度」にのみ主効果が見られ、交互作用が確認された。自己隠蔽をあまりしない人のうち、男女の家庭での在り方について平等的でない考えをもっている人ほど性の多様性に寛容である。これは、性役割について測定した「脱男性役割」とは逆の結果となっている。男女の家庭での在り方に平等な考えをもっていない人のうち、自己隠蔽しやすい人の方が性の多様性への寛容さが高いことについて、安達・池上(2016)は、男性は女性に比べて、男性役割規範(「男性は、辛いことがあった際、強くあるべきである」など)への自我関与の程度が高く、規範に従って思考し行動する傾向が強いため、平等主義規範(「人は、全ての人にやさしくするべきだ」など)がホモフォビア傾向を抑制する要因とならない可能性を示唆した。また、女性は平等主義規範が内在化しているため、ホモフォビア傾向を抑制することが可能であったと考えた。トランスジェンダーへの態度においても、同性愛の結果と類似していた可能性があり、このことから、家庭における平等主義的な考え方よりも自己隠蔽の程度が、性の多様性への寛容さに影響を与えている可能性が考えられる。しかし、本研究では、その心的過程を捉えることが出来ていない。また性差についても検討していないため、性差が結果に及ぼす影響についても、今後さらなる検討が必要になるだろう。

自己隠蔽の傾向が少ない人のうち、平等的な考えをもっていない人の方が性の多様性への寛容さをもっていることについて、安達ら(2016)は、男性は外発的偏見抑制動機が顕現化される状況の設定によって、ホモフォビア傾向が抑制されるのか検討する必要があることを述べている。このことは、同性愛だけではなく、トランスジェンダー

に対しても同様のことが言えるかもしれない。先行研究において安達は、男性は同性愛者に寛容な姿勢を示さなければならないという社会的要請や他者からの期待といった外圧を、外発的偏見抑制動機として指している。本研究では男女の家庭参加で聞いた項目がセクシュアリティへの平等性に対する社会的要請や期待として外発的偏見抑制動機となった可能性がある。そのため男女の家庭での在り方がはっきりとしている人ほど、トランスジェンダーへの偏見が抑制され性の多様性への寛容さへと繋がったことが可能性として考えられる。

2: トランスジェンダーの尊厳について

第 2 因子「トランスジェンダーの尊厳」において、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」に主効果と交互作用が見られた。性役割との関連について、吉村(2018)は自身のジェンダーアイデンティティの一致一貫性同一性の高い人ほどトランスジェンダーの人間的価値について肯定的な態度を示すとしている。つまり、自身のジェンダーアイデンティティの一致一貫性同一性の高さだけではなく、その人が性別に対して固定化されたイメージをもっているかどうかもトランスジェンダーの人間的価値に肯定的な態度を示す要因である可能性が示されたといえる。自己隠蔽高群が低群よりも得点が高く、脱男性役割低群が高群よりも得点が高いという結果は第 1 因子「性の多様性への寛容さ」と第 3 因子「トランスジェンダーへの抵抗感の無さ」における傾向と逆の結果になっている。第 2 因子「トランスジェンダーの尊厳」の項目と第 1 因子「性の多様性への寛容さ」、第 3 因子「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」の項目と比較してみると、第 2 因子の項目は、自身がトランスジェンダーと関係することではなく「トランス

ジェンダーの人は、皆と同じように自らの課題と向き合っている人間である。」や「トランスジェンダーの人は、ほかの人と同じように住む権利を有するべきである」といった自身の信念を問う内容だったことが、自己隠蔽しやすく性別に対して固定化されたイメージをもつ人でも共感しやすく比較的答えやすい内容であったため、得点が高くなった要因として考えられる。また第 1 因子「性の多様性への寛容さ」と第 3 因子「トランスジェンダーへの抵抗感の無さ」ではトランスジェンダーとの関係を問う項目が含まれていた。このことが「否定的(negative)もしくは嫌悪的(distressing)と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向(河野, 2000)」という他者から回避する傾向をもつ自己隠蔽しやすい人にとって答えにくい項目であったため、自己隠蔽低群の伸びにくさに繋がっていると考えられる。

3: トランスジェンダーへの抵抗感のなさについて

第 3 因子「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」において、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」に主効果と交互作用が見られた。性別に固まったイメージをもっている人のうち、自己隠蔽の傾向が少ない人の方がトランスジェンダーへの抵抗感が少ないことについて、中田(2015)は自己隠蔽の低い人ほど SNS で落ち込んでいることについても書き込む傾向があると示していることから、自己隠蔽の傾向が少ない人は自身の言いにくいことを他者に表現しやすいように、「トランスジェンダーである」という相手の言いにくいことについても比較的肯定的であることができるのではないだろうか。また、自己隠蔽の傾向が少ない人のうち性別に対して固定化されたイメージをもっていない人の方が抵抗感が少ないことについては、「男性とはこうあるべ

き」や「女性はこうあるべき」という男性像や女性像をもっていないためトランスジェンダーという存在を受け入れやすく、その結果トランスジェンダーに対して抵抗感をあまりもたないことに繋がったと考えられる。

4:対人魅力について

「対人魅力尺度」について、「自己隠蔽尺度」と「脱男性役割」に主効果と交互作用が見られた。性別に対して固定化されたイメージをもっている人のうち自己隠蔽の傾向が少ない人の方が、カミングアウトされた後も相手に肯定的な印象をもち続けることについて、自己隠蔽の傾向が少ない人は自分の悩みを他人に隠すことが少ないため、他人からの秘密や悩みに対しても否定的になりにくいことが示唆される。自己隠蔽の傾向が少ない人のうち性別に対して固定化されたイメージをもっていない人の方が、カミングアウトされた後も相手に肯定的な印象をもち続けることについて、性別に対して固定化されたイメージをもっていない人は、相手が男らしくないことや女らしくないことにも寛容であるため、トランスジェンダーというカミングアウトを受けたとしても相手との距離感を離さないといえる。

また、「自己隠蔽尺度」と「男女の社会的平等」に主効果と交互作用が確認された。自己隠蔽の傾向が少ない人のうち男女の社会的な役割に平等な考えをもっている人の方が、カミングアウトされた後も相手に肯定的な印象をもち続けることについて、「対人魅力尺度」には「～さんと個人的なことでも話したい。」や「～さんと一緒に遊びたい。」といったトランスジェンダーとの交流という社会的な人間関係を問う要素を含んでおり、男女の社会的な役割に平等な考えをもって

いる人はトランスジェンダーであっても社会的に平等に接したいという意識があったため得点が高くなる傾向が見られたのではないだろうか。このことから、トランスジェンダーそのものに対してどのような考えをもっているのかというものとは別に、カミングアウトされた際でも、相手と良い関係をもち続けたいと思えるかどうか、相手に対する態度と関係してくるのではないかと予想される。

5:仮説の検証

以上のことから、仮説 1 について、第 1 因子「性の多様性への寛容さ」と第 3 因子「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」では概ね支持されたが、第 2 因子「トランスジェンダーの尊厳」では逆の結果となった。以上のことから仮説 1 は一部支持された。

仮説 2 では、対人魅力尺度において自己隠蔽尺度の高群において高い得点を示したので、仮説 2 については支持された。

仮説 3 について、「男性の家庭参加」と「男女の家庭参加」については全ての要因において主効果が見られなかったが、「脱男性役割」と「男女の社会的平等」では一部主効果がみられた。

仮説 4 について、対人魅力尺度において「男性の家庭参加」と「男女の家庭参加」では主効果が見られなかったが、「脱男性役割」と「男女の社会的平等」において主効果が見られ、いずれも高群の方が低群よりも得点が高かった。以下のことから、仮説 4 は一部支持された。

仮説 5 について、概ね支持されたが第 1 因子「性の多様性への寛容さ」における「自己隠蔽」と「男女の家庭参加」においては逆の結果になり、また第 2 因子「トランスジェンダーの尊厳」における「自己隠蔽」と「脱男性役割」においても逆の結果になったため、仮説 5 に

については一部支持された。

仮説 6 について、交互作用が見られた「自己隠蔽」と「脱男性役割」では自己隠蔽低群かつ脱男性役割高群で得点が最も高く、「自己隠蔽」と「男女の社会的平等」では自己隠蔽低群かつ男女の社会的平等高群が最も得点が高かった。以上のことから、仮説 6 は支持された。

6:本研究の課題

本研究では、自己隠蔽と性役割の観点からトランスジェンダーへの態度とカミングアウトされた際の態度変容について検討を行った。これまでカミングアウト研究については同性愛が対象の研究が中心だったが、今回ではトランスジェンダーのカミングアウトについての研究を行うことが出来た。また性役割などの性に関する意識や態度だけでなく、自己隠蔽という自分が人に言いにくいことをどう扱うのかという自身の在り方が他者からカミングアウトへの態度にどのように影響するのかについて、自己隠蔽という新たな要因を考慮する必要性を示唆できたことが本研究の意義であると考ええる。しかし、本研究ではいくつかの課題も出てきた。

1 つ目に、性役割について、性別に対するイメージを測定する尺度として「脱男性役割態度スケール」と「平等主義的性役割態度スケール短縮版」を使用した。この尺度だと男性についての性別に対するイメージを問う項目が多いため、「女性とはこうあるべきだ」というイメージを測るには少し弱いと思われる。そのため、今後の研究では女性に対するイメージを鮮明に測ることが必要になるだろう。

2 つ目に、「自己隠蔽」と「男女の家庭参加」における性の多様性への寛容さについての心理過程を検討する必要があることである。安

達ら(2016)も、男性は他者からの期待や公的状況によってホモフォビアが抑制されるか検討する必要があると指摘しており、トランスジェンダーにおいても同性愛と同じ結果が得られる可能性が考えられる。本研究でも男女の家庭での在り方という状況がトランスジェンダーへの偏見を抑制した可能性が考えられるため、この検討について進める必要があるといえる。また本研究では性差についての検討を行っていないため、性差が結果にどのような影響を及ぼすのかについても検討する必要があるだろう。

要約

LGBT が現代の社会において直面する問題の 1 つにカミングアウトが挙げられる。しかし、先行研究ではトランスジェンダーのカミングアウトについての研究は少ない。そこで本研究では、LGBT の中でもトランスジェンダーを取り上げ、被開示者のトランスジェンダーへの態度とカミングアウトされた後の相手に対する対人魅力について、他者からの回避行動である自己隠蔽と性別に対するイメージである性役割の 2 要因を加え検討した。調査は教職課程に在学している大学生 148 名に対して質問紙法で行った。

その結果、自己隠蔽の傾向が少ない人ほど「性の多様性への寛容さ」と「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」では得点が高く、自己隠蔽しやすい人ほど「トランスジェンダーの尊厳」について得点が高かった。また自己隠蔽の傾向が少ない人ほど、カミングアウトされた後も相手との肯定的な関係を維持しようとする傾向が見られた。

性役割については、「男性の家庭参加」と「男女の家庭参加」については全ての要因において主効果が見られなかったが、「脱男性役割」と「男女の社会的平等」では一部主効果がみられた。対人魅力において「男性の家庭参加」と「男女の家庭参加」では主効果が見られなかったが、「脱男性役割」と「男女の社会的平等」において主効果が見られ、いずれも高群の方が低群よりも得点が高かった。

「性の多様性への寛容さ」について「自己隠蔽」と「脱男性役割」で交互作用が見られた。単純主効果検定の結果、自己隠蔽尺度と脱男性役割は低群にのみ有意差が見られた。また「自己隠蔽」と「男女の家庭参加」で交互作用が見られた。単純主効果検定の結果、自己隠蔽尺度と男性の家庭参加は低群にのみ有意差が見られた。「トランスジ

エンダーの尊厳」について「自己隠蔽」と「脱男性役割」に交互作用が見られた。単純主効果検定の結果、自己隠蔽尺度と脱男性役割は低群にのみ有意差が見られた。「トランスジェンダーへの抵抗感のなさ」について「自己隠蔽」と「脱男性役割」に交互作用が見られた。単純主効果検定の結果、自己隠蔽高群と脱男性役割は低群にのみ有意差が見られた。対人魅力について、「自己隠蔽」と「脱男性役割」に主効果と交互作用が見られた。単純主効果検定の結果、自己隠蔽尺度と脱男性役割は低群にのみ有意差が見られた。また「自己隠蔽」と「男女の社会的平等」に交互作用が見られた。単純主効果検定の結果、自己隠蔽尺度と男女の社会的平等は低群にのみ有意差が見られた。

以上のことから、自己隠蔽と性役割はトランスジェンダーへの態度とカミングアウトされた後の相手への対人魅力に一部影響を与えていると考えられる。

引用文献

安達菜穂子 池上知子(2016). 平等主義規範と男性役割規範が同性愛者に対する偏見に与える影響-正当化・抑制モデルの検討- 大阪市立男学大学院文学研究科紀要, 第 67 号, 59～84

天野佑美 佐々木新 松本洋輔 大守伊織(2019). 性別違和をもつ患者の診療録から見える学校生活場面への困難さ 兵庫教育大学教育実践論集 第 20 号, 39-48

American Psychological Association (2009). Report of the APA Task Force on Appropriate Therapeutic Responses to Sexual Orientation. Washington, DC: <https://www.apa.org/pi/lgbt/resources/therapeutic-response.pdf>

Buck, D.M., Plant, E.A., Ratcliff, J., Zielaskowski, K., & Boemer, P. (2013). Concern over the misidentification of sexual orientation: Social contagion and the avoidance of sexual minorities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 105, 941-960

電通ダイバーシティ・ラボ(2018). LGBT 調査 2018
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/2019/0110-009728.html>

一般社団法人 日本経済団体連合会(2017). ダイバーシティ・インクルージョン社会の実現に向けて
http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/039_honbun.pdf, 10-14

藤森立男(1980). 態度の類似性, 話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果: 魅力次元との関連において 実験社会心理学 20(1), 35-43

石本雄真(2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究 21, 3, 278-286

石本雄真 久川真帆 齊藤誠一 上長然 則定百合子 日潟淳子 森口 竜平
(2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究 20, 2, 125-133,

日高庸晴(2005). ゲイ・バイセクシュアル男性の思春期におけるライフイベントとメンタルヘルス』小児内科 37, 巻 3 号 101-105

日高庸晴(2012). カウンセラーのセクシュアリティへの理解や教育を受けた経験に関する検討-面接調査を通じて- 広島文教女子大学心理臨床研究, 3, 18-23

日高庸晴(2016). LGBT 当事者の意識調査～いじめ問題と職場環境等の課題～ 宝塚大学看護学科日高研究所

いのちリスペクト。ホワイトトリボンキャンペーン(2013). LGBT の学校生活に関する実態調査 結果報告書

Kanamori, Y., Cornelius-White, J.H.D., Pegors, T.K., Daniel, T., & Hulgus, J. (2017). Development and Validation of the Transgender Attitude and Beliefs Scale. *Archives of Sexual Behavior*, 46, 1503-1515

河野和明(2001). 自己隠蔽尺度(Self-Concealment Scale)・刺激希釈尺度。自覚的身体症状の関係 実験社会心理学 40(2),115-121

Larson, D.G. & Chastain, R.L (1990). Self-Concealment: Conceptualization, measurement, and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, vol.9, No.4, 439-455

LGBT 法連合会 (2019). 「性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト (第 3 版)」 [lgbtetc.jp/wp/wp-content/uploads/2019/03/困難リスト第 3 版\(20190304\).pdf](https://lgbtetc.jp/wp/wp-content/uploads/2019/03/困難リスト第3版(20190304).pdf)

松下姫歌・吉田愛(2009). 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究, 9, 207-216

文部科学省初等中等教育局児童生徒課(2016). 性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について (教職員向け)

森下 俊秀 吉岡 真梨子(2019). 大学生の友人関係スタイルおよび居場所感が学校適応感に及ぼす影響第 61 回総会発表論文集 644

中村真 松田英子(2013). 大学生の学校適応に影響する要因の検討江戸川大学紀要 23, 151-160

中田美喜子(2015). SNS による大学生のコミュニケーションについて- 自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響について- 広島女学院大学国際教養学部紀要 2, 27-33

中塚幹也・江見弥生(2004). 思春期の性同一性障害症例の社会的、精神的、身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討 母性衛生, 45(2), 278-284

日本精神神経学会(2012). 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン 第 4 版 精神神経学雑誌 第 114 巻第 11 号 1250-1266

参議院常任委員会調査室・特別調査室(2017). LGBT の現状と課題-性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き- 立法と調査 https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2017pdf/20171109003.pdf

品川由佳(2006). 男性同性愛者に対するカウンセラーのクリニカル・バイアスとジェンダー関連要因との関係--実験法によるカウンセラー反応の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域 (55), 297-306

- 鈴木淳子(1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成 心理学研究, *65*(1), 34-41
- 鈴木淳子(1994). 脱男性役割態度スケール(SARLM)の作成 心理学研究, *64*(6), 451-459
- 鈴木文子・池上知子(2015). 異性愛者のジェンダー自尊心と同性の同性愛者に対する態度 社会心理学研究 *30*(3), 183-190
- 鈴木文子・池上知子(2020). カミングアウトによる態度変容・ジェンダー自尊心の調整効果・心理学研究 *91*(4), 235-245
- 和田実(2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に態度に及ぼす影響 心理学研究, *81*, 356-363
- 吉川麻衣子(2016). 心理臨床領域における「性の多様性」に関する課題と展望:2010年以降の研究動向をもとに 沖縄大学人文学部紀要, *18*, 25-40
- 吉村健(2018). 大学生のトランスジェンダーに対する態度および関連要因 京都教育大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊)